

日点委通信

No.19

2003年11月 1 日発行

日本点字の発展に対するご貢献に感謝し、
ご冥福をお祈り申し上げます

日本点字委員会会長 木塚 泰弘

今年（2003年）、日本点字委員会は二人の長老を失ってしまいました。

日点委顧問の本間一夫先生が、8月1日、かねて療養中の東京の自宅で亡くなりました。先生は1966（昭和41）年日点委創設当初からの学識経験委員であり、1978年から1990年までの12年間第3代の会長を務められ、日本の点字表記法の統一と普及に大きく貢献されました。「日本の点字制定100周年記念事業」を終えたのち、阿佐博会長に後任を託され、顧問に就任されていました。

もう一人、日点委会友の永井昌彦先生が、1月29日、京都の自宅で亡くなりました。先生は、日本点字研究会当時から理論派として活躍され、日点委創立当初から盲教育界代表委員として、主に学校文法の立場から日本語の語法に基づく点字表記法を主張してこられました。

今後、日本点字委員会は、このお二人の功績を踏まえながら、日本点字表記法の普及と改善に努めていくことが大切だと存じています。「日本の点字」第29号は、両先生の遺徳とこれまでのご活躍について特集することとしています。

日本点字委員会総会報告

日本点字委員会は、2003年5月31日と6月1日の両日、大阪市西区江戸堀の日本ライthouse盲人情報文化センターにおいて、第39回総会を開催し、次の事項を協議した。

1. 語の書き表し方に関する解説の要望など

『日本点字表記法 2001年版』を逐条で検討してきた近畿点字研究会から、特殊音の用い方、位取り記数法の適用範囲など10項目について「日本の点字」誌上で解説してほしい等の要望が出され、検討課題となった。

2. 複合名詞の切れ続きについて

複合名詞の切れ続きを、語種と区切り成分・続け成分とで整理しようとした試案が金子昭委員から披露された。

3. 多様化するアルファベット・外国語の書き表し方についての考察

アルファベットを用いて書き表されている会社名・グループ名・商品名などを外文字符と外国語引用符とを用いて合理的に書き分ける書き分け方についての試案が道村静江委員から提案され、検討課題となった。

4. 点字教科書の古文表記について

敬意などを表す補助用言の切れ続きに『日本点字表記法 2001年版』の第6章2節2.の【注意3】を全面的に採用することへの疑問が尾関育三氏から提出された。

5. 英語試験問題の点字表記について

英語の試験問題の点字表記のうち、注記号の用い方と斜線の処理の仕方について、福井哲也氏から『試験問題の点字表記』の該当箇所の修正提案が出され、検討課題となった。

6. 第11回あはき師試験問題の点字表記について

『日本点字表記法 2001年版』の点字表記で初めて実施された第11回あはき師試験問題の点字表記について、自立語内部の切れ続きやつなぎ符の用い方等についての実情報告が岩屋芳夫事務局員からなされた。

7. 点字数学記号の一部変更（数式の後の句読点の扱い）について

『点字数学記号解説暫定改訂版』（2000年9月発行、以下『数学暫定版』）の一部を変更する提案が点字科学記号専門委員会より出され、了承された。

「数式の後の句読点の扱い」については、現在の『数学暫定版』では理解しにくい場合があり、「解釈」だけでは混乱を招くおそれがあるので、『数学暫定版』4. 1の

「なお、数式の終わりに書かれている句読点は省略し、一般日本語表記の省略時の規則に従うが、上記(2)と(3)の2マスあけの規則を優先する。」

を次のように置き換える。

「なお、数式の終わりでも、句読点を使用することを原則とし、使用しないとき

は、一般日本語表記の省略時の規則に従うが、上記(2)と(3)の2マスあけの規則を優先する。」

(説明)

今回の変更は、数学記号中のコンマやピリオドの用法についてではなく、いわゆる文章記号としての句読点の扱いについてである。

現行の『数学暫定版』では、数式の前は1マスあけとなっていて問題はない。ただし、数式の後については、「なお…」の部分に変更されて次のようになる。

- (1) 数式内に関係記号(= , > , < など)が含まれていない場合には、数式の終わりを1マスあける。
- (2) 数式内に関係記号が含まれている場合には、数式の終わりを2マスあける。
- (3) 数式内に関係記号が含まれている・いないにかかわらず、数式内に必要な1マスあけが含まれている場合には、数式の終わりを2マスあける。

なお、数式の終わりでも、句読点を使用することを原則とし、使用しないときは、一般日本語表記の省略時の規則に従うが、上記(2)と(3)の2マスあけの規則を優先する。

変更前は、従来の表記を踏襲して定められていたが、その後、理科記号についても暫定改訂版が発行され、『表記法』も改訂発行された現在では、ずれが生じたためである。

実際の扱いとしても、文意を明確にするためには、句点は省略しない方がよいケースが多く、読点もなるべく省略しない方が意味の理解を損なわない。特に、試験問題等の文章題の大きい区切りを示す読点も含めて省略が原則とすると、意味の理解が妨げられる場合も少なからずあった。そこで、数式の後でも句読点を使用することを原則とすることとした。

句読点を省略するのは、次のような場合が考えられる。ただし、用例なども含めた詳細については、近く発行される予定の「日本の点字」第29号を参照されたい。

- (1) 下がり数字に続いて現れる句読点は原則として省略する。
- (2) 次の場合のコンマは省略し、原則として1マスあけまたは2マスあけとする。

数列を形成している要素間。数式が並列的に書かれ、それらが一つのまとまりとなっている場合の区切り。名称・変数・定数を表す文字列が並列的に書かれ、それらが一つのまとまりとなっている場合の区切り等。